

扉を
開く
INTERVIEW

デザイナー
株式会社ドーンデザイン研究所代表

水戸岡鋭治

Eiji Mitooka

個性的な「顔」を持つ先頭車両、天然素材をふんだんに用いた車内、金箔を施した客室の妻壁……。九州新幹線「つばめ」やJR九州の特急列車を中心に、数々の斬新な鉄道デザインを手掛けてきた水戸岡鋭治さん。数多くの国際的な賞も受賞した、そのデザインの発想の原点は、どこにあるのか。岡山での少年時代、パース画を描き続けた青年時代、JR九州との出会いなど、これまでの軌跡を振り返りながら語っていただいた。



革新的な鉄道デザインの原点

イラストの仕事から鉄道のデザインへ

——水戸岡さんはデザイナーとしてJR九州の鉄道デザインを中心に活躍していらっしゃいます。もともと絵を描くのが好きで、それが今の仕事につながったと伺っています。

水戸岡 そうですね。子供の頃は勉強が嫌いで、絵ばかり描いていました。先生や友達としゃべるのも苦手だったので、絵を描くことだけが楽しみでした。

生まれたのは、岡山県の吉備津神社の近所です。父親は洋家具の製造販売業を営んでいました。絵ばかり描いている私を見て、油絵や石こうデッサンを習わせてくれたり、好きなことを伸ばすチャンスを与えてくれま

したね。私は工業高校に進学して、インテリアデザインを専攻しました。五人兄弟の長男でしたので、いずれ家具屋を継ぐための進路です。卒業後はまず大阪のデザイン会社に就職し、三年ほど勤めてから岡山に戻りました。

でも、家具屋の仕事に身が入らず、ヨーロッパに飛び出しました。ミラノ、トリノ、ハンブルク、コペンハーゲンと、行く先々で絵を描き、美術作品を鑑賞し、自由な旅をしたのです。ミラノのデザイン会社に籍を置いたこともありました。二年ほど後に帰国し、羽田空港から高校時代の同級生の社員寮に転が

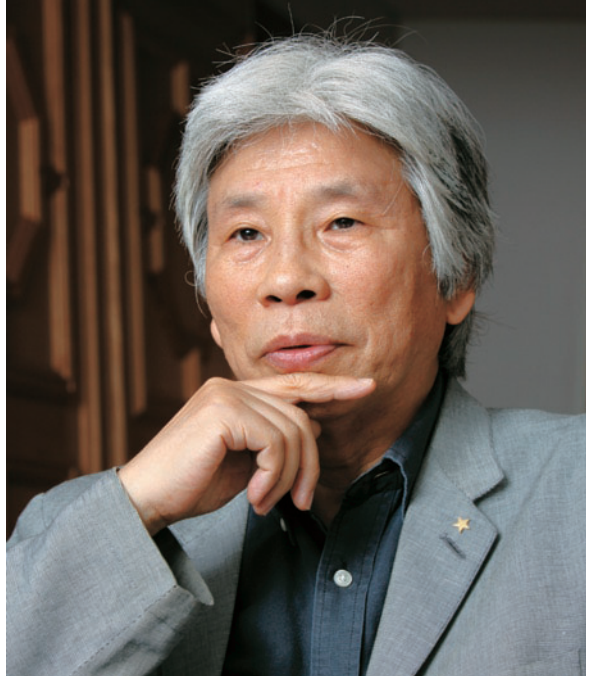
り込んで、そのまま東京で自分のデザイン事務所を開くことになったんです。日本とヨーロッパのデザインの歴然とした差を感じたことが、独立を決意させたのかもしれませんが。結局、実は家が継いで、現在も家具の製造販売をしています。弟との約束で、私は家具のデザインを通じて、家業に貢献することとしています。

——東京で独立されて、鉄道などの工業デザインを手掛けるようになったのでしょうか。

水戸岡 当初は工業デザインではなく、イラストレーターをしていました。主な仕事はマンションや商業施設などの完成予想図（パース画）を描くことです。絵を描くのが好きでしたから、イラストレーションの仕事をし、

その傍ら建築や設計の知識も周囲の友人らから教えてもらいました。

二五歳の時に独立し、それからずっと地道にパース画を中心とするイラストレーションの仕事が続けていたのですが、三〇代の終わり頃、私のイラストを見たという博多のデベロッパーから声が掛かりました。「玄界灘と博多湾に挟まれた『海の中道』（注1）でリゾート施設の開発を予定しており、出来上がりのイメージをあなたの絵で表現したい」と言うんです。結局、私はイラストレーションの仕事だけでなく、施設にかかわるビジュアル全部のデザインに関与するアートディレクションの仕事をやらせてもらうことになりました。開発プロジェクトのプロデュー



みとおか・えいじ●1947年岡山県生まれ。岡山県立岡山工業高校卒業後、大阪やイタリア・ミラノのデザイン会社を経て、72年に東京でドーンデザイン研究所を設立。住宅のバース画の制作や、家具・建築のデザインを多数手掛ける。88年福岡市の「ホテル海の中道」のアートディレクションをきっかけに、JR九州の列車・駅・広告などにかかわることになり、香椎線のリゾート列車「アクアエクスプレス」を皮切りに数多くの斬新な鉄道車両をデザイン。92年の787系特急「つばめ」、95年の883系特急「ソニック」、2000年の885系特急「かもめ」、04年の800系九州新幹線「つばめ」などを手掛け、国際的な鉄道関連デザインの賞であるプルネル賞をはじめ、毎日デザイン賞、菊池寛賞など国内外の賞を多数受賞した。JR九州以外でも、岡山電気軌道の路面電車「MOMO」、和歌山電鐵の「たま電車」、富士急行の「富士登山電車」などをデザインしている。著書に『ぼくは「つばめ」のデザイナー』（講談社）、『旅するデザイン 鉄道でめぐる九州』（小学館）、『水戸岡鋭治の「正しい」鉄道デザイン』（交通新聞社）など。また、『幸福な食堂車』（一志治夫著、プレジデント社）は、これまでの仕事ぶりを活写している。

おっしゃった。

——社長は、鉄道をよく知らない人ならではの新しい発想がほしいというお考えだったのでしょうか。

水戸岡 そうだと思います。その時、私は全く意識していませんでしたが、国鉄が分割民営化された頃で、発足したばかりのJR九州は、私のような外部のデザイナーを入れて、新しい風を吹かせようとしたのだと思います。

私にとっては、いきなり大きな舞台に上げられた瞬間でした。鉄道デザインの経験も能力もな

かったけれども、色や形を自分

たちで決められる自由さの中で、精いっぱい、力を発揮してみたいと思えました。難しいところはJR九州の専門家たちがレクチャーしてくれました。私を含め、事務所のスタッフは誰も鉄道デザインや公共交通のあり方について学んだことがなかったのですが、「この仕事は面白い、凄くやりがいがある」と、だんだん皆でのめり込んでいったのです。

（注1）福岡市東区にある志賀島と九州本島をつなぐ砂洲（長さ約八キロ、最大幅二五キロ）。

九州新幹線に地域の伝統素材を生かす

——それで生まれた水戸岡さんの鉄道デザインデビュー作が、「アクアエクスプレス」ですね。

水戸岡 はい。一九八八年から一九九二年まで、博多と海の中道を結びました。博多湾に沿って走るわけですから、「ヨットのような格好いいデザインにしたい」と関係者に話したことを覚えています。

——それまでの鉄道の常識では

ありえない、斬新なデザインが評判になりました。

水戸岡 乗客に海の景色を楽しんでもらおうと、座席を博多湾側に向けて斜めに配置したり、外装を真っ白にしたりしました。鉄道は煤を出す蒸気機関車から始まった

サーが私の絵を気に入って、仕事の権限を広げてくださったのです。これが私にとって大きな出会いとなりました。

——この時のホテルは、リゾート感があふれるデザインが評判を呼びました。そこからJR九州の仕事につながっていったのですか。

水戸岡 そうです。そのホテルのオープニングパーティーで、今度はJR九州の初代社長と出会ったんです。といっても、ほんの少し話を交わした程度で、しかも私はまだ生意気な若造でしたからJRの鉄道デザインに

ついて批判的なことを言ってしまったように記憶しています。

それにもかかわらず、後日このホテルの近くを通る、香椎線^{かしじ}を走らせる観光列車のデザインを打診されました。デザイン画を描いて持っていったら、多くの反対意見もある中で社長は「水戸岡さん、この方向でやりましょう」と言ってくれました。私が「じつは鉄道のデザインはやったことがない」と正直に話すと、「やったことがないからいいんです。予算とスケジュールを守ってもらえれば、色や形について文句は言いません」とまで

描いて持っていったら、多くの反対意見もある中で社長は「水戸岡さん、この方向でやりましょう」と言ってくれました。私が「じつは鉄道のデザインはやったことがない」と正直に話すと、「やったことがないからいいんです。予算とスケジュールを守ってもらえれば、色や形について文句は言いません」とまで



九州新幹線・新800系「つばめ」のフロントデザイン。飛翔するつばめが誇らしげに車体を飾る。

「和」のテイストを採り入れた新800系の客室デザイン。
随所に九州産の素材が使われている。



こともあって、汚れが目立つ白を外装色に用いない、というのが慣例でした。しかし私は乗客が楽しむ列車のイメージを考えた末、外観も車内の妻壁つまかべ（注）も真っ白にして、床のカーペットと椅子は黒に近い濃いグレーにするデザインを採用したんです。

それから立て続けにJR九州の仕事を手掛けることになりました。同社の社長からは「いまだかつて見たことがないものをつくってほしい」という要望を受けました。これは、その後の私の鉄道デザインに当たっての一貫したテーマと

なっています。つまり、「ナンバーワンよりもオンリーワンを生み出す」ということであり、それは私の望むところでもあります。ナンバーワンのものをつくろうとすれば、たいいていの場合、多額の予算が必要になります。でもオンリーワンだったら、技術面をはじめとした知恵を集めれば、生み出すことができますのです。

モノづくりにおいては、コスト次第でこれではできない、これはできないと考えていくことになります。しかし、知恵を絞ることで見えるコストの限界を克服できる場合もある。オンリーワンのものをつくらうと、やる気のある人たちが集まれば、アイデアの応酬が行われ、倍のスピードで倍の仕事量をこなすことも可能になるでしょう。そうして生み出されたオンリーワンが評判を呼べば、お客様も増えて、黒字がもたらされます。生み出されるものが当たるかどうかの確証はないとしても、さまざまな人が同じ方向を目指し、自分の能力を全開にしていくことが大事だと思います。

——九州新幹線を走る新八〇〇

系「つばめ」のデザインでは、車内に「和」のテイストを採り入れていらっしやいますね。座席の肘掛けやテーブルなどに自然木が使われたり、妻壁には金箔きんぱくが貼られています。私も今年の夏に乘車して、とても印象的でした。

水戸岡 車内に自然木を使用したのは、一九九二年に発表した七八七系特急「つばめ」が最初でした。鉄道デザインの中にそうした「和」を持ち込むのは、凄く難しいことです。鉄道車両はイギリス発祥の工業製品ですから、そんな「洋」に「和」を入れ過ぎるとデザインがおかしくなってしまう。そのあんばいはいまだにつかめませんが、数値で表すと新八〇〇系「つばめ」でも全体の五パーセント程度しか「和」を採り入れていないのではないのでしょうか。

でも、ほんの少しでも日本の伝統的な素材、形、色をデザインに生かすと、乗客は「新しくて懐かしい雰囲気がある」と感じてくださるんですね。それだけ「和」の伝統に力があるということかもしれません。さらに私は九州新幹線には九州の風土を乗せたかった。



そうした思いから、九州産のヤマザクラを内装材に使用したり、熊本・八代代のい草を編んだ縄のれんを洗面所に掛けたりしました。金箔を貼った妻壁には、鹿児島・川辺の仏壇職人や福岡の博多織職人の木彫や織物を額縁に入れて飾っています。

——鉄道が走るその地域の風土や伝統を車内のデザインに採り入れると、乗客が心地よさを感じることにつながりますか。

水戸岡 つながると思います。私は、航空機や自動車が鉄道のライ



フェアプレーの精神で 新しいことにチャレンジする

——水戸岡さんが「いまだかつて見たことがない」鉄道デザインを目指しても、その製作段階で現場が「できない」ということはありませんか。

水戸岡 鉄道車両にはさまざまな制約や慣例があつて、実際、車両

担当者から「できない」と言われることも多かったですね。しかし、「なぜできないのですか?」「こうすればできるのではないですか?」と問い続けるうちに賛同者が現れて、意外に「できる」ケースもありました。

生かすことが重要だと考えています。それができれば乗客の旅にさらに付加価値を提供できると思うのです。

とはいえ、自然木をデザインに

採り入れる作業だけでも容易ではありません。工業製品ではない木は、一本一本で木目や色が異なります。それを鉄道車両に素材として使うとなると、扱い方はとても難しい。手間暇を掛けた作業が必要になります。でも乗客は、それを敏感に感じ取るものです。その見えない手間暇の作業に注ぎ込まれたエネルギーの総量に対し、乗客は感動を得ます。デザインに自然木を生かした空間の心地よさは、木が持っている安全・安心な性質とともに、それを生かそうと人々が注ぎ込んだエネルギーから醸し出されるものなのです。

(注2) 車両の客室と乗降口デッキを仕切る壁。

バルだとは思っていません。ホテルがライバルだと思つています。ですから、色、形、素材、使い勝手を工夫して車内の空間の質を上げるとともに、その鉄道にかかわる地域文化をきめ細かくデザインに

は、木が持っている安全・安心な性質とともに、それを生かそうと人々が注ぎ込んだエネルギーから醸し出されるものなのです。

——最初は反対していても、挑戦しようという人が出てくる。

水戸岡 ええ。現場の人たちは、企業の社員という立場からすると、常識を破ることや面倒なことには手を出したくないという気持ちが強いのではないでしょうか。でも、彼らは企業の社員であると同時に、社会の一員であつたり子を持つ親であつたりするわけです。そちらの立場から、公共の空間にふさわしいデザインを考えてほしいと私が言い続けると、ほとんどの人たちが賛成に回ってくれるんです。

例えば、ある鉄道車両のデザインで床材に木を提案したときは、「メンテナンスが大変になります」「従来のプラスチックで構成するほうが加工しやすく、低コストです」などと、大多数が反対しました。いまだかつてないものを手掛けることに對して恐れも抱くのでしょう。それは当然かもしれませんが、私はこう言つたのです。

「子育てをしていらつしやる方は親として、休暇に旅行されるという方は乗客の代表として想像してください。子供にとって、またお客様にとって、プラスチックと木

ではどちらがいいでしょうか。みなさんは会社員であり親であり、またお客様でもある、その同一線上で人生を生きているはずですよ」

従来の常識を破り、新しいことに全員でチャレンジしようとするときは、一人ひとりが潜在意識にある正義感とかフェアプレーの精神を呼び起こし、それを基本に丸となるしかありません。誰しも「フェアプレーを前提に仕事をしたい」と心底で思っているのに、「そのような甘いことは会社では通用しない」とあきらめています。しかし、そんなことはない。企業だつてフェアプレーの精神で仕事に取り組める人材を求めているんです。そして、そうした心構えがオンリーワンを生み出し、企業に利益をもたらすことになるのだと思います。

私も、今後とも、フェアプレーの精神で、お客様に心地よさを感じていただけるような鉄道デザインを手掛けていきたいと思つています。

——本日は大変興味深いお話を伺つことができました。ありがとうございました。

(聞き手/情報サービス局長・鮎瀬典夫)